スクールホットライン

学びを深めた出前授業

from 志水小学校

志水小学校では、さまざまな出前授業を行っています。地域の方をはじめ、外部講師の方、その道の達人の方をお招きし、普段とはちょっと違う専門的なお話を聞いたり、体験活動を行ったりすることで、充実した学習活動を展開しています。

一月には、出前授業を五つ行いました。六年生では、愛知県建設部のまちづくり出前講座「つくってみよう！住みよいまち」や税務署による「租税教室」。五年生では、北部市場の仲卸業者の方による「魚大好き！　命の講座」。四年生では、「版画教室」で彫刻刀の使い方を学び、出版社の方による「百科事典の使い方」も体験しました。それらの中から、二つ紹介します。

六年生でのまちづくり出前講座では、事前にグループでどのようなまちづくりをしたいのか、めあてを決めました。「安全でお年寄りや子どもに優しいまち」「たくさんのイベントがあり、ふれあいが多いまち」「犯罪がない安全なまち」などそれぞれめあてをもって、授業に臨みました。授業では、都市計画とはどういうことかについて話を聞いた上で、大きなシートの上にまちを作っていきました。学校や病院、公園などの公共施設やマンション、家、工場、スーパーや緑などたくさんの模型があり、それをどのように配置したらよいのか、鉄道はどこを通るとよいのかなど、めあてに沿ってグループで話し合い、まちを完成しました。完成したものについて発表し見せ合うことで、児童は自分たちが住んでいるまちの在り方や今後のまちづくりについて考えることができました。

四年生で行った「百科事典の使い方」では、グループで一セットの百科事典を使って学習しました。今まであまり触れたことがない百科事典のページをめくるだけでも、たくさんの刺激がありました。「百科事典は事柄を調べるもの」と国語辞典との違いを知ったあと、調べ方で共通していることや調べ方のこつを学びました。課題の事柄を調べながら、百科事典で調べる面白さや便利さを体験することができました。

私の航空史

軍需品を民需品に

岡野允俊

戦時中一機でも多く、一日でも早くを合言葉に飛行機をはじめ軍需品の増産に全力を注いできた。なけなしの金属材料も国民の生活品をほぼ強制的に供出させ、銃後は陶磁器などを金属に代わる材料にさせられ不自由を強いられた。

そして、戦争が終わると、仕掛中の軍需品はそのまま製造を中止され、解体されていった。

まだ加工されていないジュラルミン、アルミ板は弁当箱、鍋、釜の製造に、さらに進駐軍向けのフットロッカーに、ベアリングは球を外してパチンコ機に、機体の燃料タンクに張ってあった生ゴムは草履に、アルミパイプは自転車の空気入れに、秋水の燃料貯蔵瓶を製造した磁器は一般家庭向けの電気コンロに利用されるなど民需品に戻されていった。窮すれば通ずで、本来解体して廃却される半製品も上手く民需品に転用するなどして、苦しい戦後を乗り切った。そして昭和四十年～五十年頃、高度経済成長を迎えると、今度はどんどん消費し、新しいものを求め、「節約」という言葉はこの時代には失われていた。消費こそが経済の活性化といわれ、まだ使えるものでも気前よく廃却、更新していった。

資源の少ない日本で、こんなもったいないことをしてもよいのかと思いつつ平成を迎えた。

世界が「もったいない」を大切にと動きだし、「もったいない」という言葉を生んだ日本も、しばらく節約を思い出した。原発の事故で電力節減が叫ばれ、あわせて無駄な消費をやめようという機運が甦ってきた。だが、いったん上げた生活レベルを再び戻すのは大変であろう。